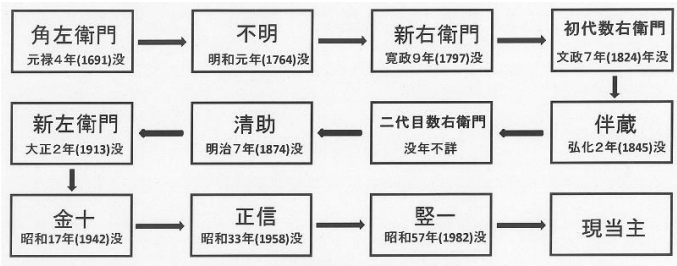
調査・研究 報告

受　入　資　料　紹　介



(図 1　稲垣家代々の系図) i,ii

法華曼荼羅（稲垣家蔵・平成 20 年度寄託）からみる稲垣家の信仰活動

富士市立博物館 学芸員 井上卓哉

広見公園の一角では現在、平成 20 年 11 月のオープンに向けて、市内大淵地区に位置し、築 200 年を越える稲垣家住宅の移築復原工事が急ピッチで進められています。この事業にともなって当館では、平成 20 年 3 月 15 日から 5 月 18 日にかけて、「富士山麓に生きる～大淵のくらしと稲垣家」展を開催しました。今回の展示会では、さまざまな資料から、大淵地区の暮らしの変化を辿るとともに、稲垣家より棟札や法華曼荼羅、養蚕関係資料などをお借りし、稲垣家の特徴を紹介させていただきました。

そして、展示会の終了にあたって、稲垣家の当主より上記資料を含めた所蔵資料（51 点）が当館へ寄託されることとなりました。そこで、これらの資料群のうち、法華曼荼羅とよばれる資料に注目し、江戸時代を中心とする稲垣家の信仰活動について考えてみたいと思います。

本稿で取り上げる法華曼荼羅とは、日蓮が自ら体得した宗教的世界を紙の上に象徴的に表現し、日蓮門下の諸派における礼拝・受持の対象としたものだとされています(『大日蓮展』東京国立博物館、2003 年)。また、中央の題目から長く延びた線が引かれることから、髭曼荼羅とも呼ばれています。

このような性格をもつ法華曼荼羅（以下曼荼羅と記す）が、稲垣家には江戸時代を中心に 17 本残されています（表 1)。これらの曼荼羅は、複数の日蓮宗の寺院から授けられたもので、その中に書かれた内容は、当時の稲垣家の信仰活動について知るための手がかりとなります。

これらの曼荼羅を所蔵している稲垣家ですが、菩提寺である大淵三ツ倉の妙富山法蔵寺の墓誌および曼荼羅に記された情報によれば、元禄 4 年（1691）2 月 11 日に没した角左衛門の代までさかのぼることが出来ます。そして図 1 に示したように、角左衛門以降、現在の当主まで、12 代にわたって大淵地区で暮らしを営んできました。

さて、稲垣家に残された曼荼羅のうち最も古いものは、

(写真 1)

写真 1 の元禄 4 年（1691)2 月 11 日に、日諄より初代の角左衛門の妻に宛てられたものになります（表 1-No.1)。ただし、この曼荼羅を書いた日諄は法蔵寺や、日蓮宗の総本山である身延山久遠寺の歴代ではなく、どのような経緯で角左衛門の妻が授かったのかについての詳細については記されていません。

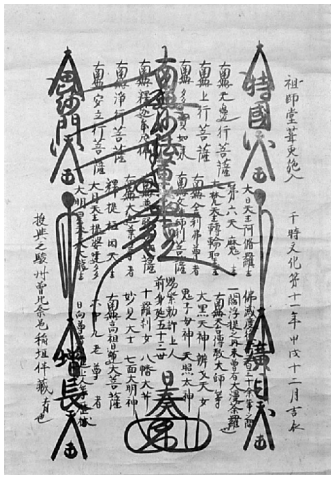
3 代目の新右衛門は、妻も含めて 3 本の曼荼羅を授かっています(表 1-No.4-6)。その内の 2 本は菩提寺である法蔵寺 22 世の日勤より授けられたものですが、もう 1 本は久遠寺 49 世の日地より授けられたものであることがわかります。法蔵寺の住職の話によれば、日蓮宗の総本山の歴代より曼荼羅を授かるということは、歴代に近い関係にある人物か、よほど大きな寄進や寄付をしたことが想像できるとのことです。

4 代目の数右衛門は、現在移築復原作業が進められている稲垣家住宅が完成した時の当主ですが、法蔵寺 22 世の日勤および 23 世の日進から曼荼羅を授かっています(表 1-No.7-8)。曼荼羅に記された内容によると、施餓鬼会の際の寄進と、父母の菩提月に金 6 両を奉納したことに対して授けられています。

ここで、江戸時代中期の 1 両（元文小判）を、米価、賃金（大工の手間賃)、そば代金をもとに当時と現在の価

格を比較してみると、米価では 1 両＝約 4 万円、賃金で 1 両＝30～40 万円、そば代金では 1 両＝12～13 万円ということになる[i]ことから、稲垣家から法蔵寺へかなり高額の奉納を行っていたことがわかります。

五代目の伴蔵が授かった 4 本の曼荼羅の中には、興味深い内容が記されているものが含まれています(表 1-No.9-12)。



(写真 2)

(写真 3)

まず、文化 11 年（1814）に久遠寺 53 世の日奏より授けられた曼荼羅は、祖師堂（日蓮を祀る堂閣）の屋根の葺き替えの際の寄付に対してのものです（写真 2）そして、翌年の文化 12 年（1815）には、佐渡にある妙照寺 41 世の日迅より曼荼羅が授けられています（写真 3）。妙照寺といえば、日蓮が佐渡へ配流となって、在島の大部分をすごした寺で、日蓮の主義や思想が確立した場所だとされています。

稲垣家の資料群の中には、妙照寺の大黒天神を描いた刷り物の軸も存在することから、おそらく伴蔵は佐渡へ渡り、軸や曼荼羅を入手したことが考えられます。

これらの資料からは、菩提寺である法蔵寺に対してだけではなく、久遠寺や妙照寺といった日蓮にゆかりの有る場所へ寄進や参拝をおこない、日蓮の足跡を追う熱心な信徒の姿が浮かび上がってきます。

さらに、六代目の二代目数右衛門とその妻は、「醍醐一千部成就の砌」と称して法蔵寺 28 世の日乗より曼荼羅を授かっています(表 1-No.14)。法蔵寺のご住職によれば、おそらく経典を千回読んだ夫妻に対して、その信仰の厚さを讃えて授けられたものであるとのことで、この資料からも稲垣家の熱心な信仰の姿を垣間見ることができます。

●　●　●

ここまで見てきたように、江戸時代の稲垣家では、非常に熱心な信仰活動が行われてきたことが、曼荼羅に記された内容から明らかとなります。その要因の一つに、富士山麓に位置する大淵地区の厳しい自然環境を指摘することができます。

大淵地区は、富士山の火山活動に伴う溶岩流の上に、火山灰や泥流が堆積した場所に位置しています。降った雨はすぐに地中深く浸透してしまうために、飲料水を得ることすら困難な地域であるうえに、農作業を行うためには硬く締まった火山灰や泥流を砕いて開墾しなければならず、暮らしを営むには非常に厳しい場所でした。このような環境で一家が元気に暮らし、子孫が繁栄することを切実に願う気持ちが、熱心な信仰活動という形として現れてきたのかもしれません。

No	資料名	年代		サイズ（cm）		内容
		和暦	西暦	縦	横	
1	曼荼羅	元禄4年	1691	48.8	34.5	2月1日 日諍より角左衛門内宛
2	曼荼羅	宝永6年	1709	50	33.8	10月13日 日亨より斉藤儀左衛門母あて
3	曼荼羅	安永5年	1775	33.5	14.5	11月 日鵬より新右衛門宛
4	曼荼羅	天明5年	1785	40.8	31	7月 日勤（法蔵寺22世）より新右衛門宛
5	曼荼羅	天明5年	1785	42.1	32	7月 日勤（法蔵寺22世）より新右衛門妻宛
6	曼荼羅	寛政9年	1797	50.4	34	正月 日地（久遠寺49世）より新右衛門宛
7	曼荼羅	享和2年	1802	49.9	34.8	霜月 日勤（法蔵寺22世）より初代数右衛門宛 「成就本尊授与大施餓鬼之砌請求仕送□□依有之者也」
8	曼荼羅	文化5年	1808	48.8	34.3	9月 日進（法蔵寺23世）より初代数右衛門宛 数右衛門の父母の菩提月に金六両を奉納したことに対するもの
9	曼荼羅	文化11年	1814	48.8	34.2	12月 日奏（久遠寺53世）より伴蔵宛 祖師堂の葺き替えの際の寄付に対するもの
10	曼荼羅	文化12年	1815	49.1	34.4	3月11日 日迅（妙照寺41世）より伴蔵宛
11	曼荼羅	文政9年	1826	50.4	35.2	正月 日恵（法蔵寺25世）より伴蔵宛 伴蔵の父母の菩提月に金三両を奉納したことに対するもの
12	曼荼羅	文政9年	1826	51.3	32	5月 日建より伴蔵宛
13	曼荼羅	天保2年	1831	36.1	17.3	6月 日乗（法蔵寺28世）より二代目数右衛門宛 願主になったことに対して（ただし、数右衛門は1824に死去）
14	曼荼羅	天保9年	1838	51.4	36	3月 日乗（法蔵寺28世）より二代目数右衛門夫婦宛 醍醐一千部成就の砌
15	曼荼羅	弘化2年	1845	51.7	39	11月 日仲（久遠寺64世）より清助宛
16	曼荼羅	嘉永6年	1853	75	40.8	9月 日讃（法蔵寺30世）より清助宛
17	曼荼羅	昭和2年	1927	50.1	34.5	3月 日深（法蔵寺41世）より金十宛 家内安全を祈願して

(表 1)

i 系図のもととなる墓誌のデータは、富士文化財愛好会会長宮崎武頼氏から提供を受けた。

ii 墓誌には二代目数右衛門の名は出てこないが、曼荼羅の記載では、5 代目伴蔵と 7 代目清助の間に、4 代目数右衛門とは戒名が異なるもう一人の数右衛門の名前を確認することができた。

iii 日本銀行ホームページ（http://www.boj.or.jp/oshiete/money/q057.htm）を参照。